

ふくろうの染め物屋

昔むかし、高取の森に、フクロウがおったそうな。

フクロウは腕の立つ染め物屋さんです。

「おじさん、きょうはお出かけだから、とびきりキレイに染めてよ！」

「よしきた！」

フクロウは、たくみな筆さばきで、小鳥の羽をみるみる鮮やかな赤色に染めていきます。

「どげんね。この色合いは。」

「とってもいいね！ありがとう！」

すると他の鳥も集まってきました。

「おじさん、わたしも染めてくださいな」

「ぼくも染めてよ！」

「まかせんしゃい！」

こんな調子で、フクロウは鳥たちの羽をきれいに染めてやるので、森のみんなにたいそう喜ばれていました。

ある日のこと。このフクロウのところへ、一羽のカラスがやってきました。

「おい、おやじ。この羽を世界一美しい色に染めてくれ。」

カラスは偉そうに、でんとふんぞり返って言いました。

自分のことを頭がいいと言って、とてもうぬぼれていましたから、森のみんなに嫌われていたのです。

フクロウはいやな客だなと思いましたが、

「へい、へい、いかようにも。」と頭を下げ、カラスの言うとおりに羽を染めていきました。

「色が薄いぞ。これじゃあ、目立たないじゃないか。」

「へい、今度はいかがでしょう？」

「もっと派手に染めぬか。」

「へい、わかりました」

「他の色はないのか！」

「へい」

いくら染めてもカラスは気に入りません。

フクロウは、もうてんでこ舞いです。

とうとう最後に「この下手くそめ。」カラスは思いっきり怒鳴り散らしました。

ずっと我慢していたフクロウも、これにはもう我慢出来なくなりました。

フクロウは、「えいっ」と、カラスを頭から墨つぼに沈めると、取りだして言いました。

「これこそ、世界一！」

そう言われて、喜んで鏡を見たカラスはビックリ仰天。

そうです、カラスは体中真っ黒になっていたのです。

かんかんに怒り出したカラスは「なんだこれは！よくもこんな縁起が悪い色にしてくれた

な！」と叫ぶと、

そして昼間はカラスが怖くて表に出られなくなってしまいました。

それからというもの、フクロウは昼間の明るいうちに外の様子を見ることが出来なくなりました。

そして、カラスが眠る夜になると大きな目を開け「ホーウ、ホーウ、コロックゾー」と鳴くようになったとさ。